

式辞

著者	石川 淳志
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	29
号	3-4
ページ	26-27
発行年	1983-03-20
URL	http://doi.org/10.15002/00018270

式 辞

葬儀委員長 石川 淳 志

一昨日、四月二〇日、私達は、突然、悲しい報せに接しなければなりません。日頃敬愛する栢野晴夫先生が、あまりにも急に、ご逝去されたのであります。

うかがうところによれば先生は、知人とご歓談の後、ご帰宅なさろうと、地下鉄新橋駅の階段を下りられる途中、何かの拍子でおつまづきになり、階段からホームを経て、線路まで落下され、強く頭部を打たれたそうでありました。医師の診断によれば、直接のご死因は、頸椎損傷となっております。時に四月二〇日零時三七分のことでありました。

前日まで、にこやかに談笑されていた先生のお声は、もう聞くことができせん。また私たちを、時には厳しく、時には懇切に、ご指導下さっていた先生のお姿に、再び接することも、今はかたがたありません。何と悲しくも、冷厳な現実なのであります。

かえりみますと、先生は、一九一七年にお生まれになり、一九三一年東京農業大学農学部農業経済学科をご卒業後、財団法人協調会に勤務されていましたが、戦時中一時兵役に服務された後、戦後は中央労働学園大学の教壇にお立ちになり、中央労働学園大学が、法政大学社会学部として新しく生れ変ると同時に、一九五一年より引続き法政大学の専任教員として勤務され、今日に至った方でありました。法政大学社会学部においては、農業政策論の講義を担当しておられました。特に農村出稼労働の実証的研究には力を注がれ、毎年夏休みには、学生をつれて、実態調査に出かけられるのが、恒例でありました。またこの間、法政大学において、学生部長事務取扱をはじめ、財務担当常務理事、社会学部長、大学院委員会議長など、数々の役職を歴任され、さらに現在は、法政大学生活協同組合理事長および中央労働学園理事長、東京文科アカデミー校長の要職にも、就任されておりました。また最近では、私学国庫助成の運動

でも、全国の私立大学教員の先頭に立ち、教授会連合の代表幹事として、大いに活躍されていた最中であつたことも、忘れることはできません。

このように先生は、法政大学社会学部創設以来の最古参教員というだけでなく、実質的に学部創設に携わり、また、その後の社会学部における教育と研究の充実・発展に精魂を傾けてこられた方であり、さらに、法政大学における数々の役職を歴任してこられた大学の功労者でもあり、そしてなお現在、現役の法政大学教授として、幾多の役職にも就かれ、また今後一層のご活躍が期待されていた方でもあります。私たちが、今日、法政大学社会学部葬という形で、先生をお葬いし、悲しいお別れをさせて頂く所以であります。

現在法政大学は、町田校地開発問題を抱え、来るべき新たな時代へ向って、大きく飛躍しようとしております。私たちの社会学部もまた、教育と研究のより一層の充実と発展を願って、学部改革と町田問題に、前向きに対処しようとしております。思えば、今日に連らなる町田校地の開発問題に、最初に手をつけられたのは、他ならぬ栢野先生でありました。私たちは、先生の卓越した先見性に、あらためて敬意を表さずにはおられません。そして同時にまた、先生が心から望んでおられた、町田の新天地における教育と研究の充実・発展を、私たち自身が、先生に代って実現する決意を、一段と新たにせざるをえないのであります。

先生、どうぞ安らかにお休み下さい。

先生がお創りになり、そして今日まで、はぐくみ育ててこられた法政大学社会学部は、今後とも、ますます発展し続けるであります。私たちはそうした努力を傾けることこそが、先生のご遺志に報いる道であることを知っております。

先生どうぞ、いつまでも、法政大学と社会学部の行く末を、見守り続けて下さい。

先生のご冥福を心からお祈りして式辞といたします。

一九八二年四月二三日